

特集

第 75 回国立病院総合医学会 (WEB) を開催して

上之原広司

国立病院機構仙台医療センター院長

(2022 年 1 月 6 日受稿、2022 年 1 月 6 日受理、連絡先：上之原広司・仙台医療センター 院長)

今回、第 75 回国立病院総合医学会を開催するに当たりその歴史を調べてみました。「医療」第 27 巻第 3 号 241-55 によるとその起源は昭和 21 年 11 月に久里浜で医療研究会として発足し、第 3 回より国病・国療の総合研究会という名称になり、4 回から 10 回までは医務研究発表会、11 回の名古屋での開催から国病・国療総合医学会の名称になり次第に発展してきました。発足間もないころは日本の医療の総力が結核に向けられているところで結核病学会の様相だったとのこと。その後、分科会の形式で拡大し総合医学会になってきたとされています。それとともに関連各職種（コメディカル部門）の参加、特に看護部門の参加により大きな学会となってきたとのこと。開催地は 5 年に 1 回は東京、その他、大阪、京都、名古屋、仙台、札幌、別府等で開催されていたようです。その後、国立病院の独法化などを経て、現在は毎年 1 回、グループ担当理事（北海道東北、関東信越、東海、近畿、中国四国、九州）の各担当区域単位の持ち回りで開催しており、令和元年度国立医療学会臨時社員総会・評議員会において、第 75 回は北海道東北グループが担当し、大会長施設は仙台医療センター、副会長施設は米沢病院、宮城病院に決定しています。近年、北海道東北グループでは開催地を仙台市、札幌市で交互に開催しており、前回は札幌市で開催していたことから、第 75 回は仙台市で開催する運びとなりました。ちなみに過去の仙台での開催は独法前の 2001 年に第 56 回大会を会長は国立療養所宮城病院院長岩崎祐三先生、副会長を国立仙台病院院長山

内英生先生で行い、独法後は 2009 年に第 63 回大会を会長菊地秀先生で行っています。

今回の第 75 回大会は 12 年ぶりの開催であり、会長は仙台医療センター院長上之原広司、副会長は米沢病院院長飛田宗重、宮城病院院長永野功の体制で準備を開始し、会場を仙台国際センターと隣接する東北大学百周年記念会館川内萩ホールとし、全員交流会は仙台市内の 1,500 名が入るホテルを予定、2021 年 10 月 22 日(金)、23 日(土)の 2 日間を計画し、現地開催を模索しました。しかし、感染リスクをゼロにすることは困難であると判断し、2021 年 5 月、完全 WEB 開催に変更するに至りました。

本学会のテーマは、2011 年の東日本大震災から 10 年、新型コロナウイルス感染症対応、懸命に医療に従事している国立医療機関の職員の思いを込めて、主題：社会の大転換期における国立医療 副題：救う、支える、育む、拓く～連帯と挑戦～といたしました。これは会長、両副会長の 3 人が候補に挙げたテーマからキーワードを会長がつなぎ合わせた合作です。

開会式は当院大講堂、配信スタジオを当院大会議室とし、2021 年 10 月 23 日(土) 8 時 50 分から厳粛な雰囲気のもと始まりました。開会式では、大会長による開会宣言後、楠岡英雄国立病院機構理事長から開会の辞を賜り、井原和人厚生労働省医政局長、村井嘉浩宮城県知事、佐藤和宏宮城県医師会会長、石井幹子宮城県看護協会会長からご祝辞を頂戴し無事終了しました。引き続き、楠岡理事長のオープニングリマークスにおいて、冒頭に新型コロナウイルス

ス感染症に対しての機構としてのこれまでの対応についてのご報告があり、その取り組みについては厚生労働大臣や外部有識者から「国等からの様々な要請に国立病院機構が応えられなければ、日本は大きな混乱に陥ったと考えられる」「今回のコロナ対応についての貢献は極めて大きい」などと最大級の評価を得ることができたとの報告がなされました。

特別講演 1 として東北大学大学院医学系研究科微生物分野 押谷仁教授より「COVID-19 に関して何がわかっていて、何がわかっていないか」の題で最近の知見を交えて講演いただきました。「有効なワクチンが短期間に開発・実用化されたことは COVID-19 対策上大きな進歩であったが、デルタ株への有効性の低下、接種後の時間経過とともに起こる免疫の減衰、ブレークスルー感染でも 2 次感染をかなりの頻度で起こす可能性があることなどの限界も示されてきている。ワクチンのみによって COVID-19 が制御できる可能性は低く、これから公衆衛生対策を含めた様々な対策を組み合わせる必要がある」と講演を結ばれました。続いて、特別シンポジウム 1「国立病院機構としての新型コロナウイルス感染症対応」は森田茂樹座長のもと、機構本部、急性期病院、神経難病、精神、急性期と結核などの機能を有する複合型の病院からの演者よりそれぞれの対応状況をご報告いただき、国立病院機構の全体像をお示しいただきました。これからのウィズコロナの診療体制を考えていく上で示唆に富んだ発表の数々でした。すべての職種において大きな変革が求められている状況での情報交換の場として一助となりえたものと思います。

2021 年は東日本大震災から 10 年目に当たり、東北大学災害科学国際研究所の今村文彦先生より特別講演 2 として「東日本大震災の発生と今後の防災」と題して災害科学の進化と防災の発展についてご講演いただきました。東日本大震災が明らかにした問題・その後 10 年間の進展・今日も残る課題を総括した。このような研究成果を紹介し、各地で変貌する災害リスクへの対応を考えていきたい。東日本大震災の教訓として、「われわれは備え以上のことはできません。危機管理と対応計画は最悪のシナリオ

に基づいている必要があります。事前防災は確実に被害を軽減できますがゼロにはできません。不確実な状況下での判断と対応が必要です。そのためにはレジリエント社会（回復力）構築が必要」と締めくくっています。引き続き特別シンポジウム 2「東日本大震災後 10 年を経た災害医療の変遷」では高橋毅、山田康雄座長のもと、小井土雄一 DMAT 事務局長より「令和の災害医療とは～多職種連携による保健と医療の一元化～」の発表をはじめ、東日本大震災における宮城県での災害医療対応、関東・東北豪雨での茨城県常総水害、熊本地震、西日本豪雨について現地 NHO 病院より報告があり、最後に令和元年房総半島台風、令和元年東日本台風、令和 2 年 7 月豪雨について若井聡智 DMAT 事務局次長より豪雨災害の現状について報告されました。更に、特別シンポジウム 3「COVID-19 に対する災害対応」と題して、小井土雄一座長のもと、実働された演者より DMAT としての病院及び自治体支援、NHO 病院による地域の自治体対策本部あるいは救急ステーション等の現場での活動等が報告された。近藤久禎 DMAT 事務局次長は「病院・施設クラスターに対し支援、入院待機患者に対し災害時の救護所、SCU、巡回診療の考え方を応用した、入院待機ステーションの設置・運営、往診制度の確立といった



第 75 回国立病院総合医学会ポスター

対応を行った。このような災害医療の考え方をういた対応・支援は、新型コロナウイルス感染症患者が増加しても防ぎえる死亡、悲劇を低減するための対応として必須である。このような災害医療活動に国立病院機構は随所で患者受入れ、人員の派遣、行政への助言など幅広く貢献している」とまとめた。これらは COVID-19 再拡大時の支援体制のあり方に先駆的事例として取り上げられ、整備されていくことが期待される。さらに、オンデマンド配信によるシンポジウム、一般演題にも優れた発表が多く、大変素晴らしい大会となりました。

今回の学会の内容としては特別講演 2、特別シンポジウム 3、シンポジウム 26、スポンサードセミナー 9、一般演題 1,378（口演 280、ポスター 1,098）、若手医師フォーラム 19（口演ライブ配信 8、ポスター 11）、企業 WEB 展示 9 で充実した内容でした。

閉会式は、開会 1 週間後の 2021 年 10 月 30 日（土）16 時から行われた。上之原広司会長からの挨拶後、高橋毅次期会長（熊本医療センター院長）、上山秀嗣次期副会長（熊本再春医療センター院長）、森田茂樹次期副会長（九州医療センター院長）からご挨拶

を頂戴し、第 76 回国立病院総合医学会の PR 動画が公開された。最後に飛田宗重副会長、永野功副会長からの閉会の辞をもって第 75 回国立病院総合医学会を閉会した。オンデマンド配信は閉会式後も継続し、2021 年 11 月 20 日（土）まで行われました。

第 75 回国立病院総合医学会を振り返ると、実行委員会のメンバーの思いとして、「今大会は東日本大震災後 10 年目の節目、2 年ぶりの現地開催で盛大なおもてなしをしたい！」と準備を進めてきたが 2 年続けて WEB 形式での開催となったことは非常に残念な結果となった。しかし、新型コロナウイルス感染症に負けず、WEB という IT 技術を駆使して全国大会を開催し、医療の最先端の情報、各病院の研究成果等を情報共有できたことは、国立病院機構が新型コロナウイルス感染症と戦いながら、その先を見据えた対応を考える機会となり大変有意義な学会であったと考えている。実行委員会のメンバーである当院職員、副会長施設、北海道東北グループ、その他本学会に携わった方々のご支援ご協力により、無事第 75 回国立病院総合医学会を終えることができたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。



大会実行委員会集合写真
仙台医療センター、米沢病院、宮城病院、北海道東北グループ